2026.6.10 風間規男

功利主義と隣人愛

群衆の一人が言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。」イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」そして、一同に言われた。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、こう自分に言ってやるのだ。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。』しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」

（ルカによる福音書 12章 13-21節）

政策学部の風間です。23年前に本学に移ってきて、チャペルアワーでお話しするのは今回で4度目になります。毎回、どのようなお話をするのか悩むのですが、キリスト教文化センターからは、同志社スピリットウィーク期間中のチャペルアワーなので同志社の建学の精神と関連づけた話をして欲しいと依頼され、迷った末につけたのが、この「功利主義と隣人愛」というタイトルです。

私は、政治学の立場から政策を研究していて、政策学部では、政策過程論・政策形成論といった科目を教えています。これらの学問のベースにあるのは、「政策科学＝政策を科学する」という考え方です。政治的な都合だとか、権力闘争だとか、イデオロギーだとか、そういうものができるだけ政策の内容に影響しないようにする。政策の質を高めるには、科学的な観点から合理的に政策を作る必要がある。政治的な駆け引きやイデオロギーとは違った科学に基づく論理で政策を作る。そういう考え方に基づいて発展してきたのが「政策科学」です。

では、科学的な観点からみて合理的な政策とはどのようなものでしょうか？ これを私なりに解釈すれば、その政策が実施されることによって生み出される幸せの上昇度、これを経済学では「効用」といいますが、社会に生み出される効用の総和が最も大きな政策が合理的な政策だということです。経済学では、これを「パレート最適」といい、パレート最適を満たすものが科学的な観点からみて最も合理的な政策であり、パレート最適を満たす政策を追求すべきだと主張されています。

この主張を社会思想からみると、「最大多数の最大幸福」を目指す「功利主義」にとても近い考え方だといえます。功利主義は、イギリスの思想家ベンサムが主張したことでよく知られています。ベンサムは、この功利主義を「どう生きればいいのか」という人間の生き方に関連づけて主張しました。ひとりひとりの人間が、今、この選択をすることが社会全体のためにプラスになるのかということを判断基準として行動すれば、社会全体がよくなっていく。そのようなイメージで主張したのがベンサムの功利主義です。

ベンサムは、個人の側の判断基準という観点から主張を展開したのですが、功利主義において、個人と国家の関係を逆転させると、そのとたんに恐ろしい話になっていきます。つまり、国家の側から、

ある個人に対して、「このように行動することが国家のためになるんだ」と強制する際の理由づけに功利主義が使われることになります。功利主義は、全体主義に結びつきやすい危うい思想でもあるのです。

国家のために戦地に行け。国家のために他国の人と戦い殺戮してこい。命を投げ出してこい。そうすることが国全体のためになるんだからと。こうなると、功利主義は、個人の自由を抑圧する全体主義の思想として機能し出してしまうわけです。

科学的な観点からみて合理的な政策とは社会全体の効用の総和が最も大きなものと考える功利主義の危うさ、これをもっとわかりやすい例を使って考えてみましょう。

「トロッコ問題」というのをご存知でしょうか？ 1967 年にフットという人が提起した倫理学の命題です。ハーバード大学で政治学を教えているサンデルは、「白熱教室」というテレビでも放送された授業での冒頭、このトロッコ問題を少しアレンジしたものを学生たちに問いかけます（『ハーバード白熱教室講義録＋東大特別授業』）。次のような問いかけでした。

あなたは、遠くからたくさんの人をのせた電車がこちらに向かってくるのを鉄橋の上から見ています。先を見ると線路がとぎれていて、このままでは脱線して多くの死者が出てしまう。どうしようかと思って隣を見たら、そこに太った人がいて、鉄橋から下をのぞきこんでいる。もしも、この人を鉄橋から突き落とせば、目の前に落ちてくる人間をみて、電車の運転手は急ブレーキをかけて止まるだろう。そうすれば、突き落とした人は死んでしまうけれども、事故は防ぐことができて多くの人命を救うことができる。あなたは、その人を突き落とすか？ そのような問いかけでした。

社会全体の最大幸福を願う功利主義者ならば、迷わず隣の人を突き落とす判断をするでしょう。なぜなら、ひとりの命の犠牲で多数の命を救うことができるからです。白熱教室の学生の中には、躊躇せずにそうすると答えた人もいました。しかし、ほとんどの人は迷います。そして、多くの人は隣の人を突き落とすという行動には出ません。このことは、われわれが功利主義の基準で行動しない、別の基準を大切にしていることを意味しています。

より多くの人を救うためであっても、人を突き落とさない。抑制が働く。その理由を突き詰めて考えると、そこにあるのが「良心」なのだと思うわけです。

みなさんもご存知のように、大学の正門に置かれている良心碑には、「良心之全身ニ充満シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ」という新島襄の言葉が刻まれています。ここで新島襄が言っている良心とはなんでしょうか？ 大学のホームページでは、次のように説明しています。良心とは、外部から命令されるものではなく、自分の中で善悪を判断し、責任を引き受ける精神のありようのことだと。

では、自分の中で善悪を判断する際の拠り所とはなんでしょうか？

実は、キリスト教徒は、この点について明確な答えを持っています。それは、最後の審判の日、神のみ前に立って、自分は「神の意志」にかなった行動をしたと申し開きができるということです。

では、神の意志にかなった行動とはなんでしょうか？ この点については、聖書の中でイエス・キリストがはっきりと言っています。「隣人を愛せ」ということです。この教えを民衆に理解してもらうために、イエスは、あるたとえ話をしています。それが有名な「善きサマリア人」のたとえです（ルカによる福音書10章）。

ある人がエルサレムからエリコという街に下って行く途中に強盗に襲われます。強盗は旅人の着物をはぎ取り、半殺しのめに合わせて逃げ去ります。そこに、ひとりの祭司が通りかかります。しかし、彼はチラ見しただけで通り過ぎていきます。同様に、レビ人、これもユダヤ教の祭祀を司る人なのですが、この人も、旅人を見ると道の向こう側を通って行ってしまいます。次に、サマリヤ人が通りかかります。サマリア人は、当時ユダヤ人が差別の対象にしていた人たちでした。そのサマリア人は、旅人を見て気の毒に思い、近寄っていき、その傷にオリーブ油とぶどう酒を注いであげます。そして、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱しました。翌日、宿屋の主人にお金を渡し、「この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに私が支払います」と言って立ち去ります。

そして、イエスは問いかけます。「この3人のうち、だれが強盗に襲われた旅人の隣人だと思うか」と。答えは明白です。サマリア人です。

このサマリア人は、誰に命令されたわけでもなく、掟に従ったわけでもなく、ただ心の中に沸き起こった良心によって、強盗にあった人に手を差し伸べました。これが「隣人愛」というものです。

重要なのは、内面から湧き上がる良心に基づいて、自分の行動を決めたということです。ここでは、イエスの教え、キリスト教の教えに結びつけて良心を説明しましたが、私は、そのような信仰をもっていなくても、あるいは隣人愛という言葉を知らなくても、どのような人間にも良心は備わっていて育てることができると思います。

ギリシャの哲学者プラトンは、『国家論』という本の中で、「ギュゲスの指輪」という有名な逸話を用いて、この問題を取り上げています。

羊飼いのギュゲスは、ある日、偶然、不思議な指輪を見つけます。その指輪をつけると、姿が見えなくなり透明人間になることができました。ギュゲスは、王の家来になって宮廷にあがります。そして、王妃に近づき姦通し、彼女と共謀して王を殺し、王の座についてしまいます。誰にも見つからず、罰せられないという状況に置かれたら、自分の欲望を満たすためにやりたい放題をする。これが人間の本質なのではないか。そう問われたソクラテスは、これを否定して、理性をもった人間は、たとえ報いを受けることがなくても、悪事を犯さないものだと答えます。

仮に警察に捕まらないとしても、あるいは功利主義の観点から合理的だとわかっていても、多くの人間はデュゲスのような行動はとらない。そこには、損得といった経済合理性を超えた人間の存在に基づく判断基準があるというのがプラトンの思想です。

隣人愛をより一般化して言うと、それは、相手の痛みや苦しみ、悲しみを自分の痛みや苦しみ、悲しみに置き換えることなのだと思います。社会思想の世界では、これを「間主観」と言います。ナイフで刺されたら痛い。これは主観です。ナイフで刺されている人をみたら痛い。これが間主観です。

私は、この間主観性を研ぎ澄ますことが、良心を育てることになるのではないかと考えています。ウクライナで起こっていること、パレスチナのガザで起こっていること、世界中の少数民族が直面している困難、災害の被災者が抱えている悩みなど、当事者と同じレベルの主観を持つことなど到底できませんが、彼らの置かれている状況に想いを馳せ、気持ちに寄り添うことはできるのではないでしょうか？

さて、最後に先ほどの「ハーバードの白熱教室」に話を戻します。サンデルは、人を突き落とすの

か突き落とさないのかの二択で、「トロッコ問題」という倫理問題を解釈しようとしています。しかし、実は、キリスト教徒ならば、イエスに倣い、もう1つ別の行動をとる可能性があります。

どのような行動でしょうか？ その答えは、三浦綾子というキリスト教徒の小説家が『塩狩峠』という作品の中で書き残しています。主人公の永野信夫は、「他者のために生きる」という教えに惹かれてキリスト教の洗礼を受けましたが、その教えを信じ切ることができず、悶々とした日々を送っていました。とある冬の日、主人公が乗っている列車が塩狩峠を越えようとしていました。しかし、急勾配のところで最後尾の客車が切り離されてしまい、勾配を逆走し始めます。このままでは、下り列車と正面衝突し、多くの乗客が犠牲になってしまいます。さて、永野がとった行動は？ ぜひ『塩狩峠』を読んで答えを確認してください。

以上でお話を終わります。ありがとうございました。